

概 要
第 22 回 市民と市長の対話ひろば ～もりりと語ろう、宝塚市の未来～ テーマ：持続可能な子育て・教育にかかる助成のあり方について （学童保育、私立保育所助成、乳幼児・こども医療費助成、学校給食、母子保健）
日時：令和 8 年 4 月 16 日（木） 午後 2 時～午後 4 時 場所：西谷会館 屋内活動室 参加者：18 名 出席者：森市長 企画経営部 羽田部長 他 市民交流部 古南部長 他 健康福祉部 諸留課長 子ども未来部 政処部長 他 管理部 高田部長 他
《市長のテーマ説明》 持続可能な子育て・教育にかかる助成のあり方について資料に基づき説明を行った。 （市民と市長の対話ひろば 4 月資料「持続可能な子育て・教育にかかる助成のあり方について」をご参照ください。）市民との対話を通じて見直し案をブラッシュアップし、条例改正は 6 月議会に諮る。 《対話》 1 参加者【地域医療構想と宝塚モデルについて】 ・県が進めるベッド数を減らして医療資源を地域へ振る施策に対し、宝塚市は他市の病院との連携が難しい現状があるのではないかな。 ・市の審議会等で立案されているはずの「地域医療構想」の改定内容（3 月予定）が見えてこない。 ・病院間の連携を含め、新しい視点での計画立案と丁寧な情報公開をしっかりと行ってほしい。 ➡市長 ・他市と組むのではなく、独自の「3 つのネットワーク」を構築する「宝塚モデル」を推進。近く新病院整備基本計画についてパブリックコメントで市民の意見を募る予定。 ・西谷の国保診療所と市立病院のホットラインを強化。新任医師が市立病院でも勤務する等の「顔の見える関係」を築き、バックアップ体制を確保する。 ・介護施設（ステップハウス）や子ども発達支援センターの常駐医とも連携し、医療・福祉・保健を横軸でつなぐ。 ・市内 7 つの病院が、それぞれの得意分野を活かして市立病院を中心に補完し合う体制をつくる。 ・尼崎総合医療センターや兵庫医大、さらにアクセスが良い大阪（千里）の救命センター等、県境を越えた高度医療機関とのネットワークを整備する。 ・地域医療の責任は県にあるが、市としても県を突き動かし、より実効性のあるネットワ

ークを構築していく。

2 参加者【部活動の地域移行と長期休暇中の居場所】

- ・部活動の地域移行が進む中で、西谷地区からだと活動場所までの送迎や交通費が大きな負担になる。
- ・費用を払える家庭だけがスポーツを続けられるという格差が生まれるのではないか。
- ・地域移行が難しい現状で、特に長期休暇中に中学生が活動できる居場所について、行政や教育委員会としてどのような提案があるのか。
- ・教員が忙しくなる夏休み期間なども、同様に学校で先生が対応してくれるのか。

➡担当部

- ・野球や吹奏楽（高校 OB バンド等）で受け入れ可能な団体は一部あるが、まだ不十分。今後さらに拡充していく。
- ・部活動という枠組みにこだわらず、放課後の 1 時間程度、教員の空き時間などを活用して、好きなスポーツや音楽に集まれる学校内の居場所を全校的に作っていく動きがある。
- ・専門のクラブチームでなくても、地域の方が料理を教えるといった形で家庭科室などを活用し、子どもたちと関わる中間的な場を作りたい。
- ・教員も研修等で不在がちになるため、外部講師による 1 回 100 円程度の安価な体験教室などを検討中である。
- ・夏の暑さを考慮し、運動場での活動よりも、校舎内でできるヨガ教室など、室内で過ごせるメニューを用意して子どもたちの機会を確保していきたい。

3 参加者【こども医療費の自己負担と受診控えの懸念】

- ・自己負担が発生すると、パートを休みたくない等の理由で受診を控え、感染症（インフルエンザ等）の確定診断を避ける親が出るのではないか。その結果、園での集団感染に繋がる恐れがある。
- ・世帯収入が比較的低い 20～30 代の子育て世代にとって、兄弟での同時受診や、完治までの繰り返しの通院費用は重い。
- ・全一律で負担を求めるのではなく、特に手のかかる「乳幼児」期間だけでも無料を維持してほしい。

➡市長

- ・園での判断や親の許可、1 歳未満の感染リスクなど、低年齢児特有の難しさは認識しており、整理が必要だと考えている。
- ・小児科現場では無料だから受診し、念のため薬（抗生剤等）を処方してもらうという習慣が定着している。熱が出たらすぐ受診・投薬という構造そのものが、将来的な医療費増大を招いている。
- ・「不安だから受診する」という心理に対し、LINE 等で気軽に専門医へ相談できるシステムを整備したい。通院の手間や費用をかけず、自宅で適切な判断（ホームケアで良いか受診すべきか）ができる環境こそが重要である。

・いただいた懸念や乳幼児期のあり方を含め、全体としてどのような整備が可能か、複数の選択肢を持って検討を続けていく。

4 参加者【西谷地区の限界集落化と教育・交通の魅力向上】

・人口のわずか 1%未満、高齢化率 50%超という限界集落化の現状を訴え、南部（市街地）との格差に強い不安を抱いている。

・西谷の小中学校が特認校となったが、希望者 37 名に対し入学者が 1 名に留まった現実を指摘。期待が大きかっただけに落胆も大きい。

・豊かな自然という魅力があっても「足（交通手段）」の問題が壁になっている。武田尾駅だけでなく、宝塚駅や山本駅方面から直接西谷へ入るスクールバス等の運行を検討してほしい。

・近隣他自治体の成功例（猪名川町の六瀬ほしのさと小学校等）を挙げ、西谷の自然を活かした教育の魅力をより具体的に、強力で打ち出すべきである。

➡市長

・宝塚・山本駅直結の要望は理解できるが、長距離路線は運転手確保やコスト面で非常にハードルが高い。

・まずは今回導入する「武田尾からのスクールバス兼オンデマンドバス」の実証実験を成功させることが先決。利用実績が増えれば、さらなる支援や路線の検討が可能になる。

・「西谷全体がキャンパス」という発想で、国際バカロレア（IB）教育と自然体験学習を掛け合わせ、公立ならではの質を追求したい。

・スマホ依存や不登校といった現代的な課題に対し、西谷の環境が「解決策」として刺さるような教育内容を教育委員会と共に練り上げていく。

・新しいことを次々やるのではなく、まずは現在提示している施策（IB 教育や新バス路線）を地域と共に育て、その実績をもとに次のステップへ進みたい。

5 参加者【広域バスルートの提案と手塚治虫生誕 100 周年】

・西谷に魅力を感じている層が、結果として猪名川町の「六瀬ほしのさと小学校」へ流れてしまっている現状を非常に惜しく感じている。

・武田尾駅接続に限定せず、西谷・六瀬ほしのさと小学校・山本周辺を広域に結ぶ循環ルートがあれば、利便性が高まるのではないかと。

・2028 年の手塚治虫生誕 100 周年に向け、「虫を愛した手塚氏と西谷」を象徴的に結びつける施策を打ち出し、この機会を逃さず地域を盛り上げてほしい。

➡市長

・手塚治虫生誕 100 周年に向けた盛り上げは、市としても重要視している。近々発表予定の計画もあり、西谷の魅力と関連付けたアイデアは歓迎したい。

・提案の広域ルートも含め、バス路線の新設・維持には多額の費用と運用上の困難が伴う。

・「不便だから使わない」ではなく、まずは今回提案している武田尾駅からのスクールバス・オンデマンドバスを最大限に活用して実績を作してほしい。

- ・ 利用実績というエビデンスがあつてこそ、次の発展的な投資や「次はこうしよう」という議論が可能になる。今ある資源を地域で育てていくことへの理解と協力を求める。

6 参加者【高額なバス運賃の課題と学生・高齢者への支援】

- ・ 距離制運賃のため、西谷から宝塚駅まで往復すると 1,000 円を超え、子ども 3 人の通学費だけで月 7~8 万円かかった経験がある。パート代がすべて交通費に消えるほど負担が重い。
- ・ 便数が少なく、帰りの時間が合わないため片道しか利用できない。結果として割安な定期券を買えず、毎回高額な普通運賃を払わざるを得ない悪循環がある。
- ・ 自家用車での送迎の方が安く済む現状がある。大型バスに多額の助成金を出すよりも、学生や通院する高齢者に絞った回数券や運賃助成を行い、1 人あたりの負担を下げることで利用者を増やすべきではないか。
- ・ 南部から西谷の教育に興味を持つ保護者も、1 日 2 往復の送迎負担で断念している。武田尾からのバス運行を確実かつ早期に PR してほしい。

➡市長

- ・ そもそも採算が全く取れていない路線に、さらなる運賃補助を重ねることは、制度上も財政上も非常に困難な判断となる。
- ・ 運賃の高さや不便さは十分に理解しているが、まずは限られた条件の中でも、とにかくバスを使っていただくという実績が必要。
- ・ 利用者が増え、需要があるという根拠を内外に示せるようになって初めて、「高校生の運賃を安くしよう」「高齢者への支援を拡充しよう」という議論が市民の納得を得られる環境になる。
- ・ 今後は車両サイズの変更（小型化）など、より効率的な運行形態を模索していく。

7 参加者【地域の自立性と西谷ブランドの再定義】

- ・ 外部から「限界集落」と呼ばれることもあるが、現にそこで生活している住民として、地域が限界だとは思っていない。
- ・ 高齢化や農作業の担い手不足による景色の変化は避けられないが、西谷にはまだ多くの活用方法があると考えている。
- ・ 自治会や農会、町会など既存の組織は強固であり、行政が新しい施策を打つ際にはこれらと上手く連携してほしい。地元組織の協力を得られれば、想像以上に大胆な取り組みも可能だと確信している。

➡市長

- ・ まずは「診療所（医療）」「学校（教育）」「交通（インフラ）」の 3 つの線を繋ぎ、地域が機能し続けるための土台を死守することが行政の責務である。
- ・ 専門家（神戸大学教授）を招いて西谷の地質を調査した結果、特有の粘土質の土壌や火山灰、先人の開墾の歴史が、野菜の美味しさの根源であると裏付けられた。
- ・ 西谷ネギや里芋など、他には真似できない土質が生む味の強みを西谷ブランドとして再評価し、農業支援に繋げたい。

・行政はどうしても発想が硬くなりがちだが、地元の強力な組織と知恵を出し合いながら、農業を軸とした産業振興にも取り組んでいきたい。

8 参加者【地域を支える診療所の質と心の通ったコミュニティ】

- ・自分も買い物帰りの荷物などの都合でなかなか利用できておらず、乗客のいないバスの運転手を見るたびに申し訳なさを感じている。
- ・歯科の先生の、助手や患者に対する優しく丁寧な接し方に触れ、自身が心身ともに疲弊していた際に大きな元気をもらった。
- ・内科の先生も地域活動（子ども食堂など）に深い関心を持ち、親身に相談に乗ってくれる。西谷には中に入って寄り添ってくれる素晴らしい先生がいることを誇りに思う。
- ・独居高齢者へのお弁当配布や、診療所の先生からのアドバイス（孤食を避け、喋りながら食べる工夫など）を活かした地域食堂のレシピ作りなど、住民同士の支え合いを継続している。

➡市長

- ・診療所の医師やスタッフにとって、住民の方からのこうした感謝の言葉は何よりの励みになる。必ず本人たちに伝えたい。
- ・厳しい話や課題の指摘も重要だが、このように地域の資源（診療所や人材）を前向きに捉え、応援してくれる姿勢は非常にありがたい。
- ・住民の暮らしを良くし、西谷を活性化させるためには、行政だけでなく地域の皆さんの前向きな力が必要である。今後も建設的なアイデアを出し合いながら進めていきたい。

9 参加者【地域交通の存続に向けた住民の連携】

- ・市長就任からの1年で、西谷の特性を理解する医師の招聘（医療）、国際バカロレア導入（教育）、そして新しいバス路線の確保（交通）と、西谷に寄り添った施策が着実に進んでいることを高く評価している。
- ・十数年交通対策に携わってきた経験から、地元が乗らなければ路線は潰れるという厳しい現実を指摘。行政が新しいバスを用意してくれた今、次は住民がみんなで乗って大事にする番であると強く訴えた。
- ・他方面への延伸要望もあるが、まずは現在の武田尾路線と西谷管内の路線を守り抜くことを最優先に、地域一丸となって取り組むべきだと提言した。

➡市長

- ・住民の皆さんがバスを利用してくれることが、予算を維持し路線を継続させるための最大の支援である。
- ・住民がバスを支えようと団結して利用した結果、小型バスから大型バスへランクアップし、利便性が向上した事例（月見山・長寿ガ丘地域を運行するランランバス）を紹介した。
- ・交通インフラが安定したことで、空き家が減り、新しい住宅が建ち、地価が維持されるという人口増と資産価値向上の好循環が生まれた。
- ・行政としてできる限りのサポートは行うが、それ以上に乗りたくなる工夫を住民と共

に考えたい。観光的な視点や地域独自のアイデアを歓迎し、連携して進めていく意向である。

10 参加者【高齢者の足の確保と地域情報のネットワーク化】

- ・足腰が弱い高齢者にとって、バス停まで歩くこと自体が困難。理想は自宅までの送迎だが、現実的には厳しい。新しく導入されるオンデマンドバス等の仕組みに期待している。

- ・「情報が届かないまま地域が衰退する」ことに強い危機感を持っている。会員・非会員を問わず、市の新しい施策（交通や診療所の情報）を高齢者に届ける必要がある。

- ・老人会として機関紙の発行などを通じ、市長が進める活発な施策と連動して情報を発信し、地域を盛り上げていきたい。

➡市長

- ・高齢者への情報伝達や活動の活発化に向け、市としても協力していきたい。

11 参加者【関係人口の活用とバスを利用した楽しみの創出】

- ・西谷には市外から 30 名規模のグループが年間何度も訪れ、武田尾から長谷など地域内を広く歩いて楽しんでいる。こうした関係人口の移動手段として、バス路線の維持は非常に重要である。

- ・住民が誰も乗っていないと嘆くだけでなく、自ら楽しみのためにバスを利用することを提案。

- ・「西谷夢プラザに集合してバスで移動する」といった、高齢者でも無理なく楽しめる小旅行ルートを個人的に考案中。車窓からの景色を愛でるような、移動そのものを楽しむ視点が必要である。

➡市長

- ・トレイルランの大会（山本駅～武田尾）など、市外の若い世代が西谷の自然を楽しむ動きが出てきている。住んでいる人だけでなく西谷ファンを増やす視点を大切にしたい。

- ・住民の柔軟な発想で、バス停ごとにちょっとした見どころを発掘し、それを巡る観光的な仕掛けを作るのは非常に良いアイデアである。

- ・住民が主体となって時間があるからバスでこれを見に行こうと思えるような、小規模な観光ルートの創出に期待している。

- ・住民が考えた魅力的なルートや活動については、市としても宣伝などの面で最大限に応援していく。

12 参加者【複層的な宝塚の魅力とリピーター戦略】

- ・宝塚市は都市部と自然が共存しているが、若者は神戸や三宮へ遊びに行くことが多い。市長自身は、宝塚の魅力や観光についてどのように考えているか。

➡市長

- ・宝塚の観光資源は、知っている度合いによって複層的である。宝塚歌劇のイメージが圧倒的、中山寺や清荒神といった歴史ある寺社、手塚治虫記念館、かつてのファミリーラン

ドの記憶、そして西谷の里山など。

- ・宝塚歌劇という強いネームバリューで人を惹きつけ、そこから実はこんな自然もある、歴史もあるという新たな発見を提供することで、リピーターを増やしていくことが重要。
- ・神戸や大阪のような都会は遊びに行く場所だが、宝塚は都会に近く、かつ自然豊かで素敵に暮らせる場所として住人に選ばれている。
- ・観光の魅力を一つに限定せず、訪れるたびに異なる側面が見つかるような、多様な発見がある街づくりこそが宝塚らしさであると考えている。

13 参加者【西谷の福の里構想とインバウンド・観光戦略】

- ・都会と里山が隣り合わせにある宝塚独自の構造は大きな武器。歌劇鑑賞や寺社巡りとは別に、30分でアクセスできる自然をインバウンドに売り出すべき。
- ・西谷には恵比寿や満福寺など「福」に縁のある場所が多い。単なる「自然豊かな里山」だけでなく、訪れると幸せになる「ウェルビーイング（福の里）」というテーマで巡る観光を復活させてほしい。
- ・南部の子どもたちが西谷に降りた途端「空気が美味しい」と感動するように、空気の質や緑の深さそのものが観光資源になるのではないか。

➡市長

- ・神戸市北区、三田、能勢、丹波篠山など、近隣には強力なライバルが多い。その中でなぜ西谷なのかという明確な理由（独自の選ばれる理由）を確立する必要がある。
- ・前述の地質による野菜の美味しさの違いなど、科学的・客観的な視点で西谷の特別さを深掘りしていく。
- ・西谷単体ではなく、宝塚南部の観光スポットとどのようにセットで楽しんでもらうかという回遊性や利便性を考慮した現実的な動線設計を進める。
- ・住民目線だけでなく、関西・阪神間全体の中で西谷がどう映るかを整理し、知恵を絞って観光振興に繋げていきたい。